

となりました。そして調査の結果、工事関係者もようやく渇水の原因が丹那トンネル工事であることを認めたのでした。そのような中、渇水被害の拡大とともに救済を訴える住民は増え、地域も広がっていきました。鉄道省や役所への陳情、嘆願は何百回にも及んだと記録にあります。しかし、渇水問題の解決ははかばかしくなく、昭和7年には、被害を受けている地域がまとまって、渇水救済同盟会を結成しました。そして県知事に窮状を訴えるなどして、事態はそれでも徐々に解決に向け動き出したのです。関係者の尽力と粘り強い交渉により、最終的には、函南村11

来光川の増水

丹那トンネルの工事中、トンネルから函南側に湧き出た水は来光川に捨てられていたため、来光川の水量が増えました。来光川を水源とする下流のハツ溝用水は、昔から水の配分を巡って争いが絶えませんでした。川の水が増えたため、争いごとがなくなったということです。



来光川にあるハツ溝用水の取水口

地区、蕪山村2地区、中郷村1地区、北狩野村1地区の水利組合へ見舞金として二万五千円が交付されました。当時としてはかなり大きな金額です。この見舞金などにより、渇水対策のための揚水ポンプ場や用水路などの灌漑施設等が整備されました。当時の、渇水の始まりから紆余曲折を経て見舞金の交付に至るまでの経緯は、記念碑に記され、今に伝えられています。記念碑は、渇水救済記念碑として丹那と柏谷に建てられ、二つの碑には同じ文章が刻まれています。



来光川の五反田橋北側にある揚水ポンプ場



宝蔵台下の県道沿いに建つ渇水救済記念碑

公園から流れ出る湧水を汲み上げるポンプ場の二つのポンプ場の他、新たな用水路などが造られました。渇水問題はこれで解決したように見えますが、実はそうとも言い切れません。丹那トンネル工事の以前は、水量豊かな柿沢川の水を自然に田へと引いていましたが、今は柿沢川の水だけでは不足するため、電気を使ったポンプにより水を汲み上げたければなりません。ポンプを動かす電気代も徐々に値上がりし、稲作を行う農家の中には「柏谷の水は高い」と言う方もいます。米の値段が低迷する中、水に支払う電気代とポンプ場の維持管理は、長い時を経た現在でも大きな負担となっているのです。

参考資料・文献
広報かんなみ平成26年5月号
「80年前、そして現在…」
ふるさと函南の学習 世古祐三編
傳説感懐録 佐藤友吉編
丹那トンネルの話 鐵道省熱海建設事務所
丹那トンネル 偉業と歴史 函南町

ついつい柏谷の水のことを考えてしまうのです。決して他人事ではないと思っ
てしまふのです。(小)

平井区の水道記念碑

隣の平井区でも丹那トンネル工事による渇水被害がありましたが、柏谷とは少し事情が違っていました。トンネル工事が始まると、平井では、区内の井戸がほとんど枯れてしまい飲み水にも困るようになりました。そのため、鉄道省からの援助などにより、丹那トンネルの湧水を5キロメートル以上も引き、区内に水道を敷設しました。平井の天地神社の鳥居の脇に「水道記念碑」が建っていますが、これは、その時の水道の完成を記念して建てられたもので、丹那トンネルの工事による渇水の経緯と当時の人々の苦労と努力が石碑に記されています。



天地神社の前に建つ水道記念碑

柏谷にもあつた水問題

「リニア新幹線の水問題は決して他人事ではない」



このところニュースで取り上げられることの多いリニア中央新幹線の南アルプストンネル工事に伴う大井川水系の水問題ですが、これは決して遠いところで起こっている他人事ではありません。実は柏谷にもその昔、トンネル工事が原因の水問題があったことをご存知でしょうか。

事の起りは、大正7年(1918年)に始まった東海道本線の丹那トンネル工事です。東海道本線は、それまで箱根山の北側を迂回(現在の御殿場線)していて、標高も高いため列車の速度も上がらず時間を要していましたので、時間短縮のため、新しいルートの計画が持ち上がり、その結果丹那トンネルが造られることになりました。

丹那トンネルの工事は、たくさんの方の断層と大量の水のため困難を極め、多くの死傷者を出す難工事となりました。最終的にこの工事で亡くなった人は67名に上りました。そして、工事が進むにつれ、トンネルの真上に当たる丹那や畑の野山に異変が現れ始めました。川の水が徐々に少なくなり、やがて小川は沢の奥から順に枯れていったのです。柿沢川の丹那盆地出口での水量は、五分の一に減少したと当時の記録にあります。柿沢川にはその当時、豊かな水量を利用した水力発電所が平井(現在の函南スポーツ公園の南側辺り)にありましたが、水の減少で発電が出来なくなり発電所は廃止されました。

水が枯れた丹那盆地では、たくさんの方の水を必要とする稲作などの農業はもとより、飲み水にも困る事態に陥りました。そしてこの水問題は丹那だけでなく、柿沢川や谷下川などの水を利用していた流域のたくさんの方の地域に、水不足という困難をもたらしたのです。もちろん柏谷も例外ではありませんでした。も

丹那トンネルの水の行方

丹那トンネル内に湧き出す水の量は、1日10万トンといわれています。その内6万トンが函南側へ、4万トンが熱海側へ流れ出ていて、函南、熱海とも水道水として利用しています。

以前、NHKの「プラタモリ」で熱海を特集した時に、「熱海は温泉街として急速に発展したため水不足に陥りましたが、丹那トンネルの工事で水が出たため、水不足は解消されました。良かった！良かった！」というくだりがありました。丹那トンネルから水を得て恩恵を受ける人達がいたら、丹那トンネルに水を奪われ苦労する人達もいたのです。

流れ出てくる柿沢川から水を引いています。柿沢川の水量が激減したため、柏谷でも水田に水を入れることが出来なくなりました。まさに死活問題です。

やがて、水枯れで窮した住民たちは声を上げ始めました。初めに丹那や畑の住民が行動を起こしました。水枯れは、大量の水が流れている丹那トンネル工事の原因としか考えられず、住民たちは「水を返してくれ」と鉄道省(国鉄)に何度も訴えました。初めは水枯れと工事の因果関係を認めなかった鉄道省も、拡大していく被害の状況を受け、本格的な調査を行うこと



写真は、丹那トンネルの熱海側の入口です。入口の上部にある「2578」と「2594」の数字は、工事の開始と完成の年を、皇紀で表したものです。皇紀2578年は大正7年に、皇紀2594年は昭和9年に当たります。



トンネル上部の皇紀表示